

# 「高千穂夜神楽」を題材とした作品づくりと評価

高橋るみ子

はじめに

宮崎県内では、この数年、地域の踊り・芸能は、体育科以外にも、生活科や総合学習の教材として積極的に取り上げられてきている。しかし本来の体育科での位置づけ（表現学習の“創作”に対する“伝承”）には変化がなく、そろそろ体育教材として柔軟に取り扱う時期に来ていると思われる。この柔軟な取り組みについては、本田や中村ら民族舞踊・民俗芸能に詳しい研究者の報告は多いが、<sup>(1)</sup>創作学習をベースにした研究報告は少ない。そこで『高千穂夜神楽』（重要無形民俗文化財）を題材に、創作学習の単元学習を（実験的に）実践し、その成果と問題点を報告する。すでに先行研究の『宮崎のこどもと表現運動—高千穂のこどもと神楽』（宮崎大学教育学部紀要第72号1992）において、夜神楽の実態と小中学校の取り組みの調査および教材研究（夜神楽の何が学習内容になり得るか）を行い、高千穂の子どもたちに合わせた模倣・表現運動の学習単元（夜神楽のイメージや動きを毎時の課題に表現や創作を楽しみ、発表へつなぐ）を作成・提案した。今回は大学生を対象に、この提案した学習単元を実践し、学習成果を、伝承と創作の二方向から分析・考察する。

## 本論（研究方法・結果と考察）

研究は、①「ダンスⅡ」の実践（平成9年度前期）、②作品発表—第10回全日本高校大学ダンスフェスティバル、③受講生へのアンケート調査、④高千穂中学校体育館での作品発表、⑤高千穂中学校第3学年へのアンケート調査、の方法で実施した。受講した学生31名（男子22名／女子9名）の内、実際に夜神楽（神楽宿）や観光神楽（33番の中でも客受けのする4番が高千穂神社で舞われる）を観た経験のある者は3名、テレビCMなどで以前から興味をもっていた者は5名であり、事前の関心は低かった。そこで資料として60分のVYR（高千穂町教育委員会編集）と『高千穂神楽』（小手川善次郎著 1951）を準備した。一方中学生（91名）は、夜神楽や観光神楽を観た（74%）、学校行事で踊った（48%）、神楽宿で踊った（3%）といった実体験をもちながら、夜神楽に興味のない生徒も多く（76%）、観光神楽で舞われる4番について知っている生徒は41名であった（43%）。従って、実際の夜神楽を観たことがない24名の回答を除き分析の対象とした。〈創作〉夜神楽のイメージや雰囲気表現することを学習単元全体のねらいにし、特徴的な動きを

自分たちのリズムや動きで踊ることを重視させた。創って踊った学生は、「間の取り方と首の使い方、三足で止まり後一足を抜く『鎮守』、三本の指で膳を支えながら舞い上げる『本花』などが難しかった」が、「手ぶり、足さばき、ナンバといった動き（ことば）が新鮮で楽しかった」「高千穂の村まつりのにぎにぎしい雰囲気や、ホシヤの心意気を表現できた」「何度でも踊りたい」と感想を述べている。鑑賞した中学生の評価では、お面や小道具、衣装、そして雰囲気は夜神楽らしく、自分らしさを出したりリズム、音楽、動きは、夜神楽らしくなかった。また先の4番を知っている生徒は、お面をつけた『鉦女』『戸取』『手力雄』『彦舞』はよく分かり、お面のない『鎮守』や『地固』は分からなかったと回答している。夜神楽を表現したダンスについては、「男女で踊れる」「短く体験できる」「本物より迫力が出せる」と創作学習のよさを評価し、「自分も創って踊りたい」生徒も13名（32%）であった。しかし4名の生徒は、「価値や神聖さが消える」を理由に夜神楽を題材とした作品づくりに強く反対していた。〈伝承〉学生たちは、夜神楽について「そう簡単に踊れるものではない」「5分や10分で観せるものではない」、学習前に比べて「夜神楽を少し理解できた」「興味がある」と回答している。さらに27名は「いつかまた芸能をダンスにしたい」と今回の取り組みを評価している。中学生の評価では、「夜神楽が若い人に親しみやすくなる」「夜神楽に興味もてる」「夜神楽を伝えるきっかけになる」等、好意的に受け止めた生徒も多い（62%）。しかし14名（21%）の生徒は、「夜神楽を伝える意味では問題がある」と否定的であった。以上、提案した単元学習は、イメージも広がり、男女が新鮮に楽しく取り組み、特徴的な動きを使って自分なりに表現できる（創作の）よさを保証しながら、さらに地域の踊り・芸能に対する理解や興味も高まる方法であった。一方、地域の踊り・芸能は、その地域特有の文化を伝えるものである。よって提案した方法も、丁寧かつ慎重な教材研究を経て、はじめて地域に生きる文化とかかわる表現学習として認められるはずである。

## おわりに

学習課程の中で地域の踊り・芸能を取り上げるには問題も多い。夜神楽の場合も、子どもたちが住む地区によって舞いや順序が違う、女子は何年生まで舞えるのか。宗教上の理由から“神様”を扱って欲しくないといった保護者の申し入れもある。今後も地域の保存会や指導者と連携し、県内それぞれの地域に合わせた学習方法を探っていきたい。